

神奈川大学人文学会会則

第1条 本会は神奈川大学人文学会と称する。

第2条 本会は人文科学を中心とする学術を研究し、会員相互の研鑽に資すると共に、社会一般の文化の発展に貢献することを目的とする。

第3条 本会は上の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 研究会を開催し、会員の研究を発表する。
2. 研究機関誌及びその他の出版物を刊行する。
ただし、研究機関誌の執筆については細則を設ける。
3. 公開講演会、シンポジウム及び講習会を開催する。
4. 学生部会を設け、学生の文化活動を支援・促進する。
5. 本学諸学会との連絡を密にし、相互の研究の交流及び向上を図る。
6. その他本会の目的を達成するに必要と認める事業を行う。

第4条 本会の会員は本学の専任教員（特任教員を含む）及び学部学生とする。その際学部学生は学生会員となる。

ただし、非常勤講師、大学院生等（特別研究生を含む）で、本会の趣旨に賛同したものは、常任委員会の承認を得て、入会することができる。その際特別会員となる。

学生会員及び特別会員は常任委員および監事の選挙権および被選挙権を持たない。また総会での決議権を持たない。また本学を定年退職した会員で希望するものは名誉会員として常任委員会の承認を得て入会することができる。名誉会員は特別会員に含められる。

第5条 本会の事務所を神奈川大学内に置く。

第6条 本会の会務を処理するために、常任委員および監事をおく。

常任委員 会員（学生会員及び特別会員を除く）の中から互選する（若干名）。

会 長 常任委員の中から互選する。

監 事 会員（学生会員及び特別会員を除く）の中から会長が委嘱する（若干名）。

会長、常任委員、監事の任期は2年とし、再任を妨げない。

第7条 本会の会計年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

第8条 会員は所定の会費を納めるものとする。年会費は5000円とする。ただし名誉会員（永久会員）は会費を1万円一括払とする。

第9条 会員には機関誌を頒ける。

第10条 本会則の改正は総会の決議による。

附 則

この会則は2002年4月1日から施行する。

附 則

※以下の下線を2018年6月20日常任委員会で削除し、2018年6月27日の総会にて承認された。

第3条 3. 公開講演会、シンポジウム及び講習会を開催する。

第4条 ただし、非常勤講師、大学院生等（特別研究生を含む）で、本会の趣旨に賛同したものは、常任委員会の承認を得て、入会することができる。
また本学を定年退職した会員で希望するものは名誉会員として常任委員会の承認を得て入会することができる。名誉会員は特別会員に含められる。

◆投 稿 規 定◆

- (1) 本誌は、神奈川大学人文学会の機関誌であって、原則として年3回発行する。
- (2) 投稿資格は、学部学生会員を除く会員が有する。
在外研究期間中の投稿は、常に連絡が取れる状況であり、原稿、校正の締切を厳守し、守れない場合は常任委員会の方針に一任する。
- (3) 本誌は、研究論文、研究ノート、翻訳、学会動向報告、書評等を掲載する。
なお、外国語研究論文については、800字程度の日本語の要約を付記し、また、本文が英語以外の場合は英文の要約をも付記する。
- (4) 原稿の枚数については、原則として、研究論文・翻訳（400字詰原稿用紙：50枚以内）、研究ノート（同：30枚以内）、書評（同：20枚以内）、学会動向報告（同：10枚以内）とする。なお、欧文の場合はA4判タイプ用紙（65ストローク×25行）1枚を400字詰め原稿用紙1.5枚分として換算する。
- (5) 投稿原稿は、人文学会事務局に期日までに提出する。
- (6) 名誉会員の投稿については査読は行わない。
- (7) 原稿の採用の可否および掲載方法については、常任委員に一任する。
なお、特別会員（名誉会員は除く）による投稿原稿については査読を行う。
- (8) 特別会員と共著で投稿された場合、専任教員が筆頭執筆者である場合は査読をしないが、特別会員が筆頭執筆者の場合は査読を行う。
- (9) 本誌に掲載された論文などの著作権は人文学会に帰属する。
- (10) 院生の論文は指導教官の同意を得てから提出する。（修士院生の場合は指導教官の推薦書を添えて提出する。）

第196集 平30.12

In Her Shoes——山口ヨシ子先生のまなざし……………	村 井 ま や 子
ミシェル・ウエルベックとユイスマンズ	
——『服従』における《女性嫌悪》をめぐる……………	熊 谷 謙 介
「テイル」の意味と構造——時を関係づける述語としてのアスペクト……………	佐 藤 裕 美
映画『女性的倒錯』における接触の現象学……………	古 屋 耕 平
森と狼の（脱）植民地化	
——ウォルター・クレインと飯野和好による「赤ずきん」の挿絵……………	村 井 ま や 子
「党派忌避の観念」再考——19世紀初頭ヴァージニアにおける党派性と共和主義……………	遠 藤 寛 文
〈利用者〉による暴力という問題——レビュー的考察……………	笠 間 千 浪
「崖つぶちの女の子」の楽園——エミー・ヘニングスのチューリッヒ・ダダ……………	小 松 原 由 理
昭和一〇年代における詩的精神のゆくえ	
——立原道造「鮎の歌」を手がかりとして……………	松 本 和 也
陶晶孫「腕時計」——翻訳と解説……………	中 村 み どり
公民館機能の検討——求められる機能と現実の狭間をめぐる……………	齊 藤 ゆ か
縦断的調査による在日コリアンへのレイシズムの測度の基礎的検討	
——再検査信頼性、弁別可能性、相互作用……………	高 史 明
アレクサンダーの書（Ⅲ）……………	太 田 強 正

第197集 平31.3

マラルメの詩の「縁語」について	
——「密雲の低く圧しかぶさるあたりに…」を読む……………	熊 谷 謙 介
オーストラリアにおけるアボリジニ土地保有権運動と宗教……………	ポール・シャックルフォード
发育発達と子育て支援の視点から見た日本と	
ニュージーランドの子どもの健康と健康教育——食育を中心に——……………	渡 部 か な え
医療サービスの研究に着目した国内の医学・健康地理学の研究動向……………	三 原 昌 巳
アレクサンダーの書Ⅳ……………	太 田 強 正 訳
書評「上海モダン『良友』画報の世界」……………	木 之 内 誠
『古事記』神話における「死」の豊穰性——四神の物語から……………	山 田 妃 奈 乃